

BEATRICE東壁 高所におけるビッグウォールフリークライミングの実践

増 本 亮 (同人クライミングファイト)

2014年の夏、私は横山勝丘・長門敬明と共にパキスタン・チャラクサ氷河のK 7ベースキャンプにいた。新ルートから未登のバダルピークを経てK 7西峰を目指したが、バダルピークには登頂したものとの日程の不足と私の負傷によりその先には進めず途中で敗退した。敗退ではあったが、ロック、エイド、アイス、ミックスと様々なタイプのクライミングを、刻々と変わる状況に合わせてこなさなければならず、自分自身の経験と技術を全力で注ぎこんだ充実した登山であり、大きな満足感を得て帰国した。帰国後もう一度三人でK 7を目指そう、そう横山から提案されたが二つ返事で頷けない自分がいた。自分の今一番追及したい登山とはなんなのか…時間をかけて自問自答した。そして、垂直の岩壁にしがみついてフリーにこだわってじりじりと上を目指し自分のラインを引く、それこそが今自分が一番やりたい登山だという答えに行きついた。

2017年夏、その自分自身の答えを実践するために再びK 7ベースに戻ってきた。この気持ちに賛同してくれたのは佐藤裕介。様々なジャンルでハイレベルな登山をこなしてきた強力なパートナーだ。K 7をアルパインクライミングで目指す横山、長門ともベースキャンプを共にする。同じ山域を舞台に、異なるスタイルの二つのパーティーが、それぞれの目標に向かい登山を展開することとなった。

我々の目標は、昨年登ったバダルピークの西側に広がるバダルウォールと呼ばれる標高差1000mを越える大岩壁だった。この岩壁はいくつかのパーティーにトライされていたが、ピークに達したパーティー

はいなかった。この岩壁に新ルートを拓きピークに立つことを目標としていた。高所順応を兼ねてバダルウォールの偵察を念入りに行うが、なかなかこれだというラインを見出すことはできなかった。今シーズンは雪の付着が多く上部はクラックに雪や氷が詰まっているように見え、我々が実践しようとしているフリークライミングには条件が合わなかった。



ペアトリスより夕日に染まるK 7西峰を望む

2014年に来た際に気になっていた岩壁の一つにペアトリス東壁があった。ベースからも遠望できる岩壁は登攀欲を搔き立てる美しい一枚岩だ。バダルピークに納得できるラインが見出せなかった我々は、ペアトリスに可能性を見出すべく偵察に出た。双眼鏡越しに見たペアトリスには、一直線に岩壁を貫くクラックラインが目に飛び込んできた。「これだ！ これこそ自分たちが求めていたラインだ！」はやる気持ちを抑え、壁の基部まで偵察に行くと、その壁の迫力と壁を太刀割る真っすぐなクラックの美しさに息をのんだ。神のラインとでも思えるようなそんなクラックだった。中間部から先は覆いかぶさるようにオーバーハンギングしており、あんなのフリーで行ける

のか？正直そんな気持ちだった。だがそのクラックを登る自分たちを想像しただけで興奮が抑えられなかつた。目標も定まりベースでアタック用の装備の準備に入る。ロープや登攀用具に加え、上部の雪稜用にックスやクランポン、登山靴、それに10日分の食料燃料を加えた装備を事前に岩壁基部まで荷揚げし、アタック態勢を整えた。

8／1（快晴）

この先の好天周期の到来を予感させるような、遠征期間中一番の天気で気持ちも盛り上がる。荷揚げの甲斐もあり余裕をもって午前中の内にABCに着くことができ、午後からクライミングをスタート。岩壁を貫くクラックラインは、取付きから100mほどの所にあるテラスから始まっており、下部100mほどは摂理に乏しく、しかも帶のようなオーバーハング帯があり、そこを越えられるかどうかが第一の核心だった。オーバーハング帯は逆層でほとんど弱点がなく、唯一可能性のありそうな凹状を攻める。はつきりしたクラックもなくテラスからの雪解け水が流れていたので、ひとまずピトンを打ちながらエイドで進む。思いのほかホールドもあり、フリーで登れそうな手ごたえを感じ一度取り付きに戻る。改めてフリーで登り直し、思いのほかあっさりと懸案の1ピッチ目をクリア。幸先の良いスタートとなつた。



安定した氷河を辿りベアトリス東壁を目指す

8／2（曇りのち雨）

昨日の晴天はどこへ？朝から空は厚い雲に覆われ気温も低くとても寒い一日となつた。2、3ピッチ目は易しいが岩が脆く緊張した。この途中でボルトを発見してしまう。元々第一候補でなかったベアトリスは、過去の記録をしっかりと調べていなかつた。未踏のラインと思い取り付いていただけに、それなりにショックもあったがこんなことで引き返す訳にはいかない。この先のクラックはそれ以上に魅力的だ。4ピッチ目からクラックラインに入る。クラックは思いのほか泥が詰まっているところが多くエイドせざるを得なかつた。4ピッチ目はエイドアップ後すぐにフリー化に成功。5ピッチ目はひたすら泥をかき出しながらのエイドクライミングで、1ピッチに4時間もかかってしまった。マイクロストッパーや極小のカムのエイドで精神的にも厳しいものだつた。雲はどんどんと厚くなり、このピッチを終えるころには雨が降り出し下降中には本降りとなつた。滝のような岩壁を、ずぶ濡れになりながら逃げるようABCに戻つた。



ABCよりベアトリス東壁を見上げる。写真中央の顕著なクラックラインを登攀した

8／3（曇り時々晴れ）

朝、壁を見上げると信じがたいことに、全面滝と化していた壁の大半は乾いている。今日からABCを離れ壁の中での生活が始まる。今日の大仕事は全装備+水30リットルの荷揚げだ。スペースホーリン

6. 海外登山記録

グという自分の全体重を使っての荷揚げを行うが、少しでも傾斜が緩いとホールバックは動かなくなる。全力でスクワットを繰り返すような重労働と高所の影響ですぐに息が上がってしまう。昨日辿り着いた5ピッチ目終了点に着くころにはもう15時を過ぎていた。ようやくクライミングをスタートするが昨日同様クラックには泥が詰まっている。昨日の雨の影響で水が勢いよく流れている。ずぶ濡れになりながらの苦しいエイドクライミングが続いた。終盤の20メートルは乾いたクラックとなりフリークライミングを交えてスピード一気にこなすものの、終了点を作り終えるとすでに18時を回っていた。5、6ピッチ目はさらに時間をかけて掃除しなければフリーでトライすることは難しいため、先に進むことを先決とした。高度感抜群のフェイスにポータレッジを設置し、ビッグウォールでの生活が始まった。



垂直の岩壁でもポータレッジがあれば快適

8／4（晴れ時々曇り）

短い7ピッチ目を久しぶりのフリークライミングでこなすと、このルート上では貴重な小さなテラスに辿り着いた。ここからは最大の核心と思われるオーバーハンプ帯が始まる。このテラスを起点にこの核心部を攻略することにする。下から見上げた時はループのようなオーバーハンプを想像していたが、実際はそれほど傾斜しておらず少し安心する。一定の傾斜が数ピッチに渡り続いているため下から見た時は

ループ状に張り出しているように見えたのだと思う。とにかくうれしい誤算だ。フリークライミングの可能性も強く感じられ、気合いを入れてオーバーハンプ帯に入っていた。出だしの厳しいボルダームーブの後は、ストレニアスなレイバックコーナー。レイバックのようなある程度の力を出し続けなければならない動きは、低酸素の状況では極めて苦しい。全身が激しいパンプに襲われ、レストポイントでもなかなか上がった息は整わない。そんな厳しい状況を見事に克服し、佐藤がこのピッチをオンサイトした。続くピッチはルート中で最も傾斜の強いピッチ。クラックは細いうえに泥が詰まっているところが多く、エイドでの前進を余儀なくされた。マイクロストップバーの連続で精神的に厳しいピッチだった。2時間半をかけてこのピッチをこなし、ロープをフィックスして快適なテラスに戻った。



ルート攻略の基点となった小テラス。ここに4泊した。

8／5（快晴）

アタックを始めて一番の快晴が訪れた。昨日のフィックストロープを辿り11ピッチ目のスタート地点へ。傾斜は少し落ちたもののまだオーバーハンプ帯は続いている。傾斜約95度の圧倒的なコーナークラックが空に向かって伸びている。残念ながらクラックからは水が滴り、右壁は全体に濡れている。それでも佐藤は気合いを入れて果敢にフリーでトライした。厳しいレイバックとステミングの連続。全身が震え

るような苦しいレイバック体勢でプロテクションを決めていく。右壁に置いた足は今にも滑り出しそうで、ビレイする手にも力がこもり緊張が走る。前半の小さなレッジで拳を岩壁に打ち付けながら悶える佐藤。なかなか息は整わない。どれくらいその場にいただろう。意を決してそのレストポイントを離れた佐藤は、落ちかける度になんとか堪えるということを何度も繰り返し、遂に50メートルに渡る厳しいコーナークラックをオンサイトで登りきった。5000メートルを越す高所でもあり単純にグレードには表すことのできないクライミングだった。後日佐藤は、人生で最高のオンサイトクライミングだったと語っている。その先は傾斜も落ち始め、濡れた個所も少なくなり、快適にピッチを伸ばすことができた。13ピッチ目が終わるころには周りの山々の高さと比べると、随分と壁の上部まで来ていることを実感した。

翌日ここまでポータレッジをあげるつもりでいたが、ロープをフィックス、明日一気に頂上を目指すことに変更しオーバーハンギング下のテラスへ下降した。ポータレッジからは夕日に染まるK7西峰が美しい。二人は今どこにいるだろう。厳しい登山を繰り広げているだろう仲間達に思いを馳せ、明日の晴天を祈り眠りにつく。

8／6 (快晴)

満点の星空の元、フィックスストロープをユマーリングする。予定通り太陽があたり始めたころ、クライミングを開始する。無風快晴、絶好のアタック日



9ピッチ目／12b。苦しいレイバックが続く。

和となった。ただ高所と疲労の影響か二人とも動きが鈍い。傾斜も登るにつれて落ち、4ピッチの易しい快適なクラッククライミングで岩壁を抜け稜線に出た。稜線は予想外に狭い岩稜となっており、不安定な浮石も多く嫌らしいトラバースを強いられた。最後に両側がすっぽりと切れ落ちた雪稜を慎重に辿り、我々は山頂に立った。喜びは半分。我々には、まだやらなければならない重要なこだわりが残されていた。エイドアップしたピッチをフリー化し、フリークライミングのルートとしてこのラインを完成させるチャレンジが始まった。下降中に佐藤が最大の核心部である10ピッチ目を探る。登頂後で精神的にも肉体的にも辛い状況ではあるが、そんな時にこそ彼の執念は本当に頼もしく心強い。日暮れまでロープにぶら下がり、手応えを掴んでポータレッジに戻ってきた。

8／7 (晴れのち曇り)

佐藤が朝一番で10ピッチ目のムーブとプロテクションを確認し、いよいよリードトライ。ダイナミックで変化のあるムーブを流れるようにこなし最大の核心を足元にした。取付きから壁を見上げた時も、エイドで切り抜けた2日前も、このピッチをフリークライミングできるとは正直思っていなかった。佐藤の諦めずに執念深く追及する精神力が、この結果に繋がったのだと思う。この執着心こそどちらかと言えば諦めの早い私が、佐藤にもっとも期待していた部分だった。このピッチの成功で全ピッチのフリークライミングはぐっと近づき、俄然やる気も高まつた。残った時間は下部ピッチの掃除と整備に費やす。暗くなるまでクラックの中の泥をかき出し、何とかフリートライできる状態にすることができた。

8／8 (晴れのち雪)

残る3ピッチ（エイド時は2ピッチ）のフリー化のために下降を開始する。午後になると上部から雪

6. 海外登山記録

解け水が流れ始め、クラックは流水溝となってしまうため時間との勝負もある。ゆっくりとワークする余裕もなくトライは始まった。まずは7ピッチ目を佐藤がレッドポイント。レイバックとステミング主体のクラックらしいムーブから、中間部のフェイスムーブへと変化し、気持ちのいいジャムでフィニッシュ。50メートルのスケールを誇る5つ星のスーパークラックだ。佐藤がワントライで決めてくれた。さあ次は自分の番だ。もう上部からの雪解け水が達しようとしている。まだ掃除は完全ではないが時間はない。強引にトライを開始する。苦しいフィンガーチップのレイバックとステミングのコンビネーション。中間部からは、フレアクラックに今にも抜けそうな甘いハンドジャムを決めじりじりと進む。ここでいよいよ流水がクラックを伝い始めた。しかしそんなことに構っている場合ではない。びしょびしょに濡れた左手を睨み付け“絶対抜けるな”そう念じながら渾身の力を込めてジャミングを繰り返した。自分でも信じられないような力が出る時があるものだ。気が付くと終了点にクリップしていた。残るはあと1ピッチ。しかしすでにこのピッチにも流水が迫っている。明日の朝に懸けるか…しかし明日の晴天は約束されていない。ダメもとでこのままの勢いでトライすることを決める。濡れたクラック、あと1ピッチで完成するルート、明日の天候、蓄積した



6ピッチ目/12b。きれいになったクラックをフリーでトライする筆者

疲労。様々な重圧はあったはずだが、それを全く意識せずに目の前のムーブだけに集中している自分がいた。ここに我々のビッグウォールフリークライミングは完結した。

8／9 (曇り時々晴れのち雨)

完登の喜びと少しの寂しさを胸に、定宿となったオーバーハング下のテラスと別れを告げる。氷河に降り立ち見上げた岩壁は今日も凄まじい傾斜でそそり立っている。感慨よりもどちらかと言えばこの岩壁をフリークライムしたという事実を、俄かには信じられない自分がいた。新ルートではなかったが情報の無い中でのクライミングは常にリアルなオンサイトで、冒険的な要素も強かった。ビレイポイント以外には1本のボルトも使うことなく、これだけのスケールの岩壁をオールフリーで登れたことは、まさに自分が求めていた理想とするクライミングだった。今まで追求してきたアルパインクライミングと比べれば、物質的にも時間的にも余裕があったが、フリーにこだわることで肉体的、精神的プレッシャーは大きくなり、それを克服しピッチを伸ばしていくことはビッグウォールフリークライミングの厳しさであり面白さである。今回の登山ではその醍醐味を

存分に味わい、
自分の登山にま
だまだ新たな可
能性が秘められ
ていることを知
ることができ
た。自分の信念
に基づいた登山
だったからこ
そ、最後まで諦
めることなく自
分の思っている



ベースに戻るとスタッフが花束で祝福してくれた

以上の力が発揮でき、一見不可能と思われたことを成し遂げることが出来たのではないだろうか。これからも信念に忠実に登山を追及していきたいと思う。

DATA

BEATRCE (5800m) 東壁

The Excellent Adventure フリー化 600m／20ピッチ／13a

メンバー：佐藤裕介、増本亮

日程：2017年8月1日～8月9日

1997年イギリス人パーティーによって拓かれた「The Excellent Adventure」(750m、ED+／A3：初登時)のフリー化にあたる。下部120mほどはラインが違うものの、そこから先はほぼ同ルートを辿っている。下部の大テラスから先は約600mにわたってクラックが続いており、ルート上にはビレイポイント以外のボルトはない。ルートは主に3つのパートに分けられる。逆層のハング越えから下部雪田までの下部120m。中間部の傾斜の強い5～11ピッチはフリー化的際も核心となり5.12台5ピッチ、13台1ピッチと

高難度ピッチが続く。上部6ピッチは傾斜が緩まり、おおむね快適なハンドクラックが稜線まで続いている。稜線からは岩稜2ピッチと1ピッチの雪稜を経て山頂に達する。60mロープ4本を使用しカプセルスタイルで登攀。カプセルスタイルの採用は、一気に高度を稼げず、上下の移動も多くなるので、高所におけるフリークライミングにはプラスに働いたと思われる。泥の詰まったクラックや濡れたクラックは一度エイドアップし、その後フリー化している。条件の悪かったピッチも多く、グレードはその時の体感でつけられているので参考程度としたい。条件が良ければグレードが変わってくるピッチもあると思われる。



ベアトリス東壁全景と登攀ライン